

受講講義：JAPAN AND CHINA IN THE EARLY MODERN WORLD

(1) 講義内容・進め方・負担などについての感想

私が受講した講義は、「JAPAN AND CHINA IN THE EARLY MODERN WORLD」という講義で、近世の日本と中国の歴史を比較し、それぞれの類似点と相違点について考察するものであった。具体的には、中国については唐の時代から清の時代の終わりにかけて、日本については室町時代から第一次世界大戦までを扱い、それぞれの世俗文化、国内情勢、外交政策について比較した。高校生の頃世界史を選択していたこともあり、日本史はもちろんのこと中国史に関するある程度の知識はあったが、改めて学ぶ部分も多く非常に有意義であった。それとともに、日中両国の歴史に関するある程度の知識を持ち合わせながらも、すべて英語で講義を受けることの難しさを痛感したのも事実であった。講義はスタンフォード大学の学生 12 人、京大生 2 人、同志社生 1 人というメンバーで行われ、前半は日中両国の歴史に関するレクチャーを聴き、講義の後半ではその日扱った分野に関連する文献を基に感想や疑問点を自由に述べるディスカッション形式をとった。レクチャーでもディスカッションでもそれぞれ毎週予習教材が指定され、それらを読んできたことを前提に授業が進められるため、予習は必須であった。予習の分量としては、平均してレクチャーの方は教科書 50 ページほど、ディスカッションの方は文献 4～5 つといったところで、かなりの量であったが、毎週これらのタスクをやり遂げたことで英文を読む力は格段に向上したといえる。本講義ではこうした教室での授業のみならず、計 4 回にわたる遠足も含まれていた。私たちは姫路城見学、奈良の寺巡り、祇園の散策、乃木神社参拝を行い、これらの日本の名所を海外の学生とともにめぐることが非常に貴重で有意義な経験であった。

(2) SJC 学生との交流についての感想

スタンフォード大学の学生とは授業や遠足はもちろん、それ以外でも個人的に遊びに行くこともあり、まさに京都にいながら米国留学を疑似体験できるという、SJC プログラムのコンセプト通りの体験ができた。特に印象深いのは、彼らのリクエストと一緒に映画「君たちはどう生きるか」を観に行ったことで、字幕なしの日本語音声で観たため、映画を観た後彼らに英語で内容を説明するのがとてつもなく難しかった。現地の学生たちはみな何事にも積極的で、私はそこが自分含む日本の学生との一番の違いであると感じたとともに大いに刺激となった。私含め日本人の学生に積極的に話しかけてくるのはもちろん、疑問に思ったことは講義中であれすぐに手を挙げ教授に質問するところや、ディスカッションの際に教授にあてられることなく必ず誰かは口を開き意見を述べ始めるところは、私が日本人学生との差を一番感じたところであった。

総じて、このプログラムは本当に有意義なものであった。特に私は来年度以降留学に行くことを検討しているため、その際の予行演習としては最適なプログラムであった。自分の英語力の現状を再認識することができ、英語力のさらなるブラッシュアップの必要性を実感した一学期であった。

(法学部 3 回生)

受講講義：JAPAN AND CHINA IN THE EARLY MODERN WORLD

本講義は、日中それぞれの歴史を、日本は大和政権の時代まで、中国は周朝まで遡って第二次世界大戦後まで辿り、それぞれの時代の政策や思想、文化などを見ていくことで、日中間の関わりを見つけ、現在の日中関係への繋がりを考えるという内容であった。日本人は私を含め3名で、スタンフォードの学生は10名程度受講していた。毎週、「Background reading」と「Reading for discussion」があり、前者は主に講義内容の予習であり、後者については講義後、それに基づいた意見交換を行った。Readingの資料の分量は多かったが、習慣的に英文を読むことで、抵抗感がなくなり、読む速度も少し速くなったと感じる。また、先生や学生の話す速度はかなりスピーディーであり、リスニング力も少し伸びたと感じる。授業は概ね、2/3が講義形式、1/3が意見交換という進め方であったが、気になる点があればどんどん質問を出し、意見交換でも、順番に意見を述べるのではなく、思ったことをどんどん述べていくため、積極的に授業に参加していかないと何も発言せずに終わってしまうという点が大変印象的であった。フィールドトリップに関しては、本講義では4回行われ、先生の解説を伺いながら巡ることで、講義内容の理解を深めたり新たな知識としたりすることができたと同時に、自分ではなかなか足を運べないような所まで行き、スタンフォード生とも沢山話することができたため、大変良い思い出となった。期末レポートは、分量が多く大変であったが、形式面などではスタンフォード生の助けもあり、完成させることができた。

スタンフォードの学生との交流に関しては、休み時間はともにおやつを食べたり、フィールドトリップの後には皆でご飯を食べに行ったりした他、授業外でも、授業後に映画を見に行くなど、想定より交流の機会が多かった。また、期末が近づくと、授業後に皆でカフェに行って勉強したこともあり、コミュニケーションをとる機会は大変多かったと感じる。

今回、SJCの講義を受講して、まず、自分の英語力をさらに磨きをかけなければならないというモチベーションとなった。特にリーディング、リスニング、スピーキング力において、京大の授業ではできているつもりであっても、この量と速度では太刀打ちできないと感じたことは、今後私が英語を勉強する際に一つの大きなモチベーションとなっている。また、価値観の違いを所々で感じることもできた。例えば講義中に踏み絵の話をしている際、私はキリスト教の学校で高校までの12年間を過ごしてきたこともあるだろうが、歴史の授業などでは二十六聖人の話など深刻な話になることが多かった。しかし、本講義で踏み絵の話になった際、学生から笑いが出るほど軽い雰囲気講義が進んでいたことに少し驚いた。また、日中の古典を読む機会もあったが、そうした際、日本の古典ではよくあるパターンだな、と私はスルーしていた所にスタンフォード生が大変大きな反応をしていることもあった。こうした違いがあったため、勿論意見交換でも同様な場面は幾度もあり、些細なことではあったが、様々な背景を持つ人が集まっている集団で一つのものについて考える時、日本人同士で議論している時には出てこないような、実に様々な考え方があるということを実体験として肌で感じることは大変貴重であったと思う。

スタンフォード生も日本人学生も、皆3回生以上であり、ただ一人1回生であったことに最初は不安も感じていたが、こちらが求めれば周りが手を差し伸べてくれた。一つ一つ大変ではあったが、その分達成感も大きく、日本にいながらここの経験ができる本制度は、大変有意義であったと感じる。ここでの学びを活かして、今後も学びを続けたい。

(農学部 1 回生)

受講講義 : Queer Culture and Life in Japan

(1) 講義内容・進め方・負担などについての感想

Queer Culture の講義では、日本における性的マイノリティについてだけでなく、日本社会におけるステレオタイプについても学ぶことができました。日本における同性愛の歴史と漫画の関係、HIV とゲイ、良妻賢母の概念や結婚観などを、講義・映画・演劇といった形式で考えていきました。日本のことといえど、今まで学んでこなかったようなテーマが多く、とても新鮮な授業で、授業終了後も学んだことについて自分一人で考え続けていることが多かったです。また、スタンフォードの学生からの意見でアメリカと日本の違いや外国人から見た日本社会を知れたのもよかったです。

講義の進め方自体は普段京都大学で受けている授業とは変わりませんでしたが、授業に対する学生の姿勢がより積極的であったことが印象深いです。グループになって話し合う時など、私も含めて日本人学生だと、少し考えてから発言したり他の人の出方を伺ったりする人が多いため、グループを形成してすぐは活発な議論は展開されないことがほとんどだと思います。しかし、スタンフォードの学生はグループ形式になるとすぐに自分の意見を発する人が多く、議論のテンションは議論開始時から高いです。また、全体場で意見を求められた時も、次々に手が上がることが多かったです。私も最初は緊張しましたが、スタンフォードの学生にはどのような意見もまずは認めるという姿勢が感じられ、発言することに不安や緊張を抱く必要はありませんでした。そのため、何の気もなく自分の意見を発することができるようになりました。むしろ、発言することで初めて自分の存在価値を示すことができ、他の参加者と対等になれるのだと感じるほどでした。講義は、毎授業に Reading List があり、はじめのうちは大変でしたが、慣れると問題なく読みこなしていけるようになります。ただし、授業内でそれらの文献が言及され、解説してもらえるということはありません。Reading 課題は、あくまでその授業のテーマに関して自分で理解を深める予習のような位置づけだと感じました。そのため、読んだ資料の内容や講義テーマにおけるその資料の意味は、講義を咀嚼して自分で考える必要があり、その点は大変でした。しかし、資料の読解と咀嚼を自分で行うことで、受け身ではなく主体的に授業を受けることになります。その点において、むしろ学生に親切システムだと感じました。

(2) KCJS もしくは SJC 学生との交流についての感想

同志社大学の CASK というスタンフォードの学生の京都生活を手助けする学生団体が企画した Farewell Party に同じクラスだったスタンフォードの学生の好意で参加させてもらうことができました。スタンフォードの学生は、すぐにぎやかでおよそ日本の学生は出さないような声の大きさとノリでそれぞれが話すので、実は授業の休み時間からそのパワーに圧倒されていました。しかし、Farewell Party はその比ではなく、同じスタンフォードの学生の中から「Americans are loud.」と言う人がいるほどでした。みんなとても楽しんでいることは伝わるので、うるさくて不快ということはありませんでしたが、圧倒を乗り越えて苦笑いの連続でした。アメリカ人はとてもパワフルなことを体感しました。

授業中の発言の積極性や服装で自分を表していること、休み時間の盛り上がり様からは、アメリカとは積極的であることが求められる社会なのだろうと感じました。留学に行かれた方などからよく聞く話ですが、自分で自分を表現していかないと誰にも気にかけてもらえないのだと思います。海外留学や国際社会への心構えも磨くことができました。

また、スタンフォードの学生には日本国内を旅行した人も多くいて、その話を聞くことも楽しかったです。円安もあり日本は外国人にとって比較的物価が安い国だと最近よく聞きます。実際スタンフォードの学生はお土産をたくさん買い込んでいました。しかし、何人もの学生が新幹線の値段が高いと文句を言っており、新幹線は外国人にとって

も高いと感じるものなのかと興味深かったです。他にも、京都でおすすめスポットを聞かれて、銀閣寺と答えると、金閣寺は行ったことあるけど銀閣寺は知らないという人が多かったことから、外国人における寺社仏閣の有名度を知ることができおもしろかったです。

(工学部 1 回生)

受講講義 : Queer Culture and Life in Japan

(1) 講義内容・進め方・負担などについての感想

人数は15名ほどで、基本的には毎週トピックに合わせたリーディングを事前に読み、講義に加えてリーディングをふまえた議論をおこなう回が多かったが、それ以外にもゲストの先生を迎えての授業や参考上映がある回など様々な回があった。

授業にもよると思うが、私が受講した授業はリーディングを自分で用意する必要はなく、コピーが共有される形式だった。読む量は20ページ前後のことが多く、普段英語の勉強をしたり英語で論文を読んでいた人であればそこまで負担にはならないと思うが、他にたくさん講義を履修している人は毎週予習ができる時間があるかどうかを申し込む前に検討した方が良いかもしれない。また、最後の課題やプレゼンテーションが12月上旬にあるため11月下旬～12月上旬ごろまでは予習に加えてそれらに費やす時間が必要になる。さらに私が受けた授業では1回だったが、最終課題やプレゼン以外にショートペーパーの提出が何回か求められる可能性があるため、それらについても念頭において受講を考える必要がある。

授業の中では、議論に参加して発言したいことを英語でうまく言うことができずもどかしく、悔しく感じる場面も非常に多く、さらなる英語力の必要を感じた。ただ、自分の言いたいことが伝わってスタンフォードの学生が理解してくれ、授業に貢献できたと感じることができた時はとてもうれしく、自信にもつながった。私が受講した講義は日本におけるクィアの文化や歴史についての授業であったので、欧米圏とは異なるクィアへのステレオタイプや偏見、もしくは日本国内で行われている議論や文化についてなど、自分がすでに持っていた知識や実際の日本での生活の中で感じることを、さらに日本語文献によって得た情報などを話した。それによって日本人としてSJCの授業に貢献することができたと感じている。

今後SJCの講義を受講することを検討している人は、日本人学生としての視点から授業に参加して貢献することを念頭に置きながらも、自分自身の個人的な目標を定めた上で（「とにかくたくさん発言してみる」「質問の仕方を工夫してみる」など）授業に挑めば、実り多く貴重な経験になると思う。

(2) KCJS もしくは SJC 学生との交流についての感想

スタンフォードの学生とは講義以外でも一緒にご飯に行ったり遊びに行ったりする機会があり、楽しい時間を過ごすことができた。アメリカで暮らす同年代と日常的な話や価値観を共有し、話しあうことができたのはとても良い経験になったと感じる。ただし私は今回このような機会を偶然得られたが、授業を一緒に受けた人と友

達にならないといけないというようなプレッシャーを感じる必要はないと思う。予習をして授業に参加して、発言して議論に参加してみるという授業内の経験だけで既に貴重な経験、学生間の交流だと思う。本制度は、貴重な授業経験を無料で、京大からの派遣という形でさせてもらえる素晴らしい制度だと思う。

(人間・環境学研究科 博士後期課程 1 回生)